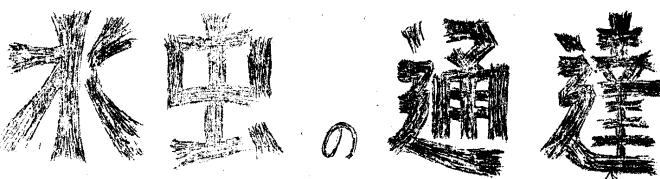


70. 6. 24

発行者 サークル連合協議会
(マル研付)



No
5

学友諸君！

昨日をもって、我々の争い
をされたことを御記しよ。

我々、ノンセクト大衆にて、6月は決戦でなくま
してや昨日に於いては最終決
戦等言えるシロモノではなか
った。6月とは、我々がどう
えた範囲で言うと、11月に破
綻したノンセクトの限界をつ
き破りことが可能なか否か
と云った一つの試練であつた
その意味に於いて、14日から
23日までの凝縮された期間は
單に序章であったにすぎない。
この序章を、いかに第一章まで
導くのか、その課題に答える
としたのが6月斗争委員会で
あつたにもかかわらず、それ

は、唯單に共同行動代案でしかあり得ず
思想性の共有及び共同性の獲得は今後の
課題としてのござれていった。

6斗委が唯一意志一致したのは「全共
斗の組織的再編強化」であつたが、そ
の具体的な内容（どうして、どのように
して、どのような方向で）は、何別段階
でしか語られてはいらず、6斗委としての
内容の共同性は克ち取ることが出来な
しまま6月の凝縮された期間を過ぎて
しまつた。我々はこの現実を素直に
認めなければならぬ。その様な現実
をいかに止揚してゆくかを展開する必
要がある。唯、しつこい様だけれど
はっきりと確認しなければならないのは、
いかゆる全共斗が我が明大に於り
ては見事な形式主義に墮落してしまふ
ことである（昨日を見よ、2千名
余の学友を結集させた明大全共斗はそ
の総括集会に於いては各個々人が分散
し各斗争委の総括をただ形式に於いて
のみ行つてゐるのだ。全てのノンセクト大衆諸君。
君達の（我々も含めて）主体の一體何れに存在するのか？
党派の諸君は普遍的政治課題をいかに全共斗を導

くのかと云う重みを背負つて全共斗を形成して
いる。我々の重みは、思想性は、一体何れに見
い出すのか？ さしのの派シニバなる自己の主
体と何が異なるかを思想化し物質化しなけれ
ばならぬであろう。あらゆる現実を思想化しなければならぬ。そ
の時、この課題を克服する道は開かれむ。

「ドジった
達が正解」

再度 我々叫ぶ、「もう失敗は許されないのだ！」全共斗運動とは一體何だ、たのか。丁寧的産物としての伝統的なノンセクト大衆（あくまで前例ではない大衆）の統一戦線ではなくか
たのか、自治会と云う既成の学内組織に代わ
る战斗的学生大衆の伯別（改良とはちがた）斗争様
式ではなかつたのか。党派の論理（阶级斗争か
ら伯別性を見い出す）と大衆の論理（伯別生活
過程から普遍的思想性まで上昇する）との相互
関係の中から展開されていった運動ではなかつ
たのか。その様な全共斗運動は現実に崩壊し
ている。そのことは、きりとくまあよう。
党派の囲い込み、引き廻しを批判する前にそれ
を生み出したのが我々であることを自己批判せ
よ。

全ての学友諸君！

全共斗運動の丁寧的性を再度討詫しよう。
全共斗運動の神化論を拒否しよう。何故なら
その結果が現在の状態なのだ。

諸党派と手を切ることを拒否しよう。それは唯
單に「党派が全共斗運動を育てたからだ」と云う単純な理由ではない。党派との相互関係（
対立、浸透）を維持するためである。我々は今
まで政治的課題を導入し争ってきた。その過程
に於いては絶対に党派とは無関係を提出出来
ない。党派も我々も存在なくしては自己の利害
を犠牲し得ない。

あらゆる日常生活にそして学内生活に思想を！
我々は生存している以上必然的に自己の思想を
(思想でなければ観念諸形態)必然的に持たざる
を得ない。しかも大學は「自己の存在状況と社
会の状況について認識出来る」可能性(ソルボンヌのアビリ)
を有してはいるが故に自己の主体とその大学の伯別性と
の関連の本で、思想性にまで高めることが可能なので
ある。その様な自己の存在を認識し自己の思想の物質化を、そして他者との共同性の獲得からさらに学内共同
性を！ 更に地域結合から

全国性へ上昇せよ！！

全
共
斗
の
再
編
強
化

六
月
斗
争
委
員
会
に
關
連
し
て

学
生
权
力
(反
权
力)

の
本
質

!!